

読書ノート

清家 篤 著

『エイジフリー社会を生きる』

黒澤 裕

(法政大学大学院博士後期課程)

本書は少子高齢化が与えるさまざまな影響を指摘し、その対応への提言について述べた本である。著者は高齢者雇用研究の第一人者であり、労働経済学が専門である。

少子高齢化が社会に与える影響は大きい。年金支給開始年齢が引き上げられ、改正高齢法による「高齢者雇用確保措置」の義務化がスタートし、2007年問題も目前に迫っている。しかしながら、本書は、決して目の前の問題だけでなく、長期的な視野で問題を捉えており、しかも、国の制度から、企業、個人生活のあり方まで解説した上で提言を行っている。簡単に各章の内容について紹介する。

第1章では、日本の人口構造の変化について概観している。人口構造の変化は基本的には経済社会の成長にともなう必然であり、団塊の世代が去ったら元に戻るといような一過性のものではなく、長期的な構造変化として捉えるべきと述べている。

第2章では、少子高齢化にともなう改革について総括的に述べている。社会保障制度、企業の雇用制度、ビジネスのあり方、個人生活の改革の必要性とその対処方法についての要点を説明している。いずれについても、現在の制度枠組みでは行き詰まることがわかっているので、抜本的に変えなければならないと主張している。

第3章では社会保障制度について述べている。公的年金保険、医療保険、介護保険について、それぞれの制度の現状等について紹介し、改革の必要性と提言を行っている。公的年金制度は、本来の目的である長寿リスクへの対応に絞るよう、年金支給開始年齢を引き上げ、支給されない期間は就労、貯蓄、私的年金などで賄うことにすること、貧困リスクの高いところ（高齢単身女性等）にしっかりとした給



●NTT 出版
2006年2月刊
B6判・253頁・1680円
(税込)

●せいけ・あつし
慶應義塾大学商学部教

付水準を確保するための制度改革を提言している。医療保険については、疾病のリスクそのものをできるだけ減らすようにし、保険制度上もそれを促すような仕組みを作ることを、介護保険制度については、要介護リスクの発生を軽減する方策等を講じることとそれを促すような仕組みを保険制度に組み込むことを提言している。

第4章では雇用制度の変革について述べている。高齢者や女性の活用の重要性を指摘し、高齢者雇用のためには、少なくとも定年年齢の延長、長期的には定年制の廃止が必要であり、定年制廃止のためには、年功賃金制度、年功的な昇進制度を変えなければならないとしている。また、高齢者雇用の場として自営業にも着目する必要があるとしている。一方、女性就労については、パートタイム労働条件の改善が必要であり、企業も労組も国の制度も雇用の多様化への対応が求められるとしている。さらに、能力開発の環境作りのため、労働時間の短縮等と能力開発の資金の確保が必要であること、個人や企業の行動と中立的になるような厚生年金制度改革が必要であると指摘している。

第5章では少子高齢化時代のビジネスについて述べている。モノからサービス、量から質、一律から多様へ、がトレンドであるとしている。また、長寿によって、人的資産、金融資産、住宅資産に関連するサービスが需要を増し、多品種少量生産のビジネ

スが競争力を高め、IT化が高齢社会を住みやすくすると予想されている。

第6章では個人生活について述べている。生涯の持ち時間の増加によりプラスの影響とマイナスの影響について挙げ、それぞれの対処方法について提言を行っている。職業人生、消費活動、社会活動の変化とその対処、また、「予想外の長寿へのリスク」、疾病、要介護のリスクを挙げ、それぞれへの対処方法について指摘している。

第7章では日本型エイジフリー社会のあり方について述べている。日本が生涯現役社会を実現できれば日本発の国際標準となると考えられること、「高齢者雇用が若年者の雇用機会を奪う」という意見の当否、高齢化にともなう地域間格差の拡大の可能性とその対応、時間の価値や年齢基準の意識、高齢者の定義を改める必要性、について記述している。

本書の特徴は、幅広いテーマでわかりやすく書いてあることである。そのため、興味深く一気に読み

終わると日本の未来像とその問題点が素直に理解できた。

一方、本書はわかり易く問題を説明するだけに留まらず、ドラスティックな変化をともなう提言を行っている。本書のテーマが幅広いだけに、その提言の是非について必ずしも十分に議論が尽くされていないように見えてしまう箇所もあった。例えば、本書では著者の従来からの主張である定年制廃止論を展開しているが、そのメリット、デメリットへの言及が不十分なまま結論が出てきているように見え、筆者のような初学者にとっては、やや唐突な印象を受けてしまう。しかしながら、本書は少子高齢化、エイジフリー社会の問題について俯瞰できる好著であり、ここでの議論を深めるためには、後書きにあるように「読者の皆様にはそれぞれの御立場でより具体的な高齢社会像を考え」なければならないのであろう。